

高崎市の遊園地

：カップピアからケルナー広場へ

小牧 幸代

目 次

●はじめに	1
●第1章 高崎市の遊園地前史	2
●第2章 遊園地の黄金時代	11
●第3章 カッパピアからケルナー広場へ	21
●第4章 群馬県内の遊園地	25
●第5章 地域社会と遊園地	30
●おわりに	32

高崎市の遊園地：カップピアからケルナー広場へ

小 牧 幸 代

はじめに

「白衣観音 慈悲の御手」。昭和 22 (1947) 年、「上毛かるた」が作られました。戦後の混乱の中にいる子どもたちに、「明るい楽しい希望のもてる遊び」を与えるためだったといえます。上毛かるたの創作は、郷土かるた、実用かるた、そして学校かるたというオリジナルかるた作りの文化を生みました。昭和 63 (1988) 年に発行された「みやま文庫」の『群馬のふるさとかるた集』には、そうした記述とともに、多くの具体例が掲載されています。その中に、昭和 60 (1985) 年の片岡小学校の作品がありました。

「楽園だ 子ども天国 カップピア」

「ループかく フェアリーランド コースター」

学校かるたの多くは、地域の地理や歴史、文化財を取り上げる傾向にあったそうです。片岡小学校では、身近な遊園地のイメージを、川柳型式で読札に刻みました。

上毛かるたの創作は、オリジナルかるた作りを促しただけでなく、その後の競技化により、子どもの遊び・学びを大人が創った代表例といえます。遊園地もまた、子どもの遊び・学びの場をどのように考え、創っていくかの表現形態のひとつです。その表現は、コストパフォーマンスという高い壁と闘いながら続けられます。

家族で休日を過ごす場として、また友人と一緒にスリルを楽しむ場として、遊園地は多くの人に利用されています。大型の遊戯機械を備えた施設の建設と維持には莫大な費用がかかるため、遊園地は潜在的な利用者の多い都市または都市近郊、あるいは大都市圏のリゾート地に立地することが少なくありません。高崎市にも、遊園地がありました。本書では、この都市型娯楽施設としての遊園地に焦点をあて、その歴史と文化を描写していきます。

最初に、遊園地前史として、観音山丘陵で公園が誕生し、観光開発が進められる様子を概観します。次に、第二次世界大戦後に始まる高崎市の遊園地の歴史を振り返ります。それは、昭和 27 (1952) 年に開催された「新日本高崎子ども博覧会」を出発点とし、市営の「高崎観音山遊園地」、上信電鉄に引き継がれ整備された「フェアリーランド」、プールも加わった「カップピア」の歴史であり、記憶でもあります。カップピアは平成 15 (2003) 年に閉園しましたが、のちに高崎市が土地・建物などを買い取り、再整備に着手し、現在はドイツの世界的遊具メーカー、

ケルナー社の遊具を設置した都市公園「ケルナー広場」として再出発しています。最後に、前橋市の中央児童遊園・るなばあく、伊勢崎市の華蔵寺公園遊園地、桐生市の桐生が岡遊園地の事例にも視野を広げたあとで、地域社会と遊園地の関係について、「遊び場」のあり方を中心に考えてみたいと思います。

第1章 高崎市の遊園地前史

第1節 観音山丘陵における公園の誕生

高崎市街地の南西部に位置する岩野谷丘陵には、その東腹に、平安初期の創建とされる清水寺があります。本尊が千手観音菩薩であることから、この丘陵は観音山と呼ばれてきました。観音山に遊園地ができたのは、第二次世界大戦後のことです。そこに至るまでの道のりを、明治初期にさかのぼって、近代日本の公園史をたどりながら見ていきましょう。

公園を「誰でも自由に利用できる造園地」と定義すれば、明治以前にも実質的な公園はたくさんありました。その多くは社寺境内地で、景勝地に立地する広い土地ゆえに、行楽を求める人びとをも惹きつけました。明治以前、社寺境内地は信仰の場としてだけでなく、遊観の場としても機能したのです。つまり、公園のようなものでした。しかし、制度としての公園が誕生したのは、明治6(1873)年1月15日に出された「太政官布告」以降です。明治6年といえば、改暦によって天保暦(旧暦)がグレゴリウス暦(西暦)に変更された年です。暦が西洋化した最初の年に、西洋の制度である公園を、日本に導入する試みが始まったのです。布告の内容は、次のようなものでした。

三府ヲ始、人民輻湊ノ地ニシテ古来ノ勝区名人ノ旧跡等、是迄群集遊観ノ場所(東京ニ於テハ金龍山浅草寺、東叡山寛永寺境内ノ類、京都ニ於テハ八坂社、清水ノ境内、嵐山ノ類、総テ社寺境内除地或ハ公有地ノ類)従前高外除地ニ属セル分ハ永ク万人偕楽ノ地トシ、公園ト相定メ被ル可キニ付、府県ニ於テ右地所ヲ択ヒ、其景況巨細取調図面相添、大蔵省ヘ伺出ヅ可キ事。

明治六年一月十五日

太政官

この布告は、公園という制度を発足させるにあたって土地が必要となるので、ふさわしい場所を選定して申告せよと言っています。東京府は、金龍山浅草寺(浅草公園)、東叡山寛永寺(上野公園)、三縁山増上寺(芝公園)、富岡八幡社(深川公園)、飛鳥山(飛鳥山公園)の5カ所を公園として伺い出しました。同様の伺いが、各府県からも出されました。太政官布告は、公園のような場所だった社寺境内地を、制度上の公園とするよう求めたのです。公園制度ができたことで、社寺境内地が以前から担っていた遊観や偕楽の機能が守られただけでなく、境内地の周辺にあった森林(上地官林)も、のちに公園に編入されることになり、乱伐や消失を免れました。

明治中期になると、公園を新たに創ろうとする動きが、各地で見られるように

なります。東京では「市区改正」と呼ばれた都市計画事業のための議論がなされ、明治 17 (1884) 年に東京府知事から政府・内務省に意見書が提出されました。この意見書を原案として内容を審議する「市区改正審査会」が同年、内務省によって設置され、翌年に議論が重ねられます。その中で、大都市である東京では、社寺境内地を利用した公園だけでは不十分だとして、人びとが「健康」に「精神を養う」場としての新たな公園設置が主張されました。そして、東京では 45 の「小遊園」と数カ所の「大遊園」が必要だと算定されたのです。

人口や面積などの数値に基づいて公園の必要箇所数や規模を算出する仕方は、基本的に現在の行政がおこなう公園緑地整備の考え方と同じです。この点で、市区改正審査会の公園計画は、日本での都市計画的な公園の始まりといえます。精神的・身体的な「衛生行政」が公園設置を機に始まったことも、同時に確認することができます。

公園設置は明治政府が近代西洋を手本とし、土地政策等を絡めつつ導入した制度であり、産業革命以降の都市に不可欠な装置として、各地の行政が主導し整備を始めたものでした。しかし、やがて官ばかりでなく、民の動きも活発になります。私財を投じて公園設置をする人が現れたのです。たとえば、明治 20 年代の大阪では、町はずれなどに「遊園」「遊園地」と称した私営の庭園がいくつも建設されました。

高崎観音山でも、明治 22 (1889) 年 1 月、清水寺住職の田村仙岳が観音山一帯に公園を作る構想を掲げ、土地を提供するので賛同者に寄付を募る、という内容の趣意書を出しました。この翌年の 4 月 25 日付の上毛新聞には、住職が本堂南の約 600 坪の土地を整地し、数百株の植樹を終え、「清水観音遊園」という名前の「遊園地」を開場したことが報じられています。もともと眺望がきく場所に花木が加わったこと、また観光イベントとして馬庭村念流の撃剣会（武術に優れた剣客の武術実演）を企画したことから、4 月の行楽日和の日曜日は大いに賑わったということです。

明治 20 年代に流行した民営の「遊園」を、現在の「遊園地」の原型あるいは「公園」の祖型と捉える見方もあります。行政の公園整備が十分でなかった時代には、民営の遊園が都市で暮らす人びとの行楽の場となったのです。しかし、当時の遊園は、主として大人たちが季節ごとの花木を愛でる憩いの場であり、現代の感覚では「庭園」のイメージに近いものでした。

明治 44 (1911) 年 4 月 5 日付の上毛新聞は、観音山が年々開拓され、桜樹も植栽されて桃林も中腹にできたため、いっそう素晴らしい景勝地になったと紹介しています。日本各地で景勝地の施設整備が進む中、明治中期から昭和初期にかけて、史跡や風景などの「名勝」を「保存」する「保勝会」が、全国的な設立をみました。保勝会は、行政ではなく、地域の住民が主体となって、郷土の風景づくりをする団体です。高崎でも、昭和 8 (1933) 年に「観音山公園保勝会」が設立されました。発起人は井上工業社長の井上保三郎で、その設立趣旨は次のようなものでした。

……。観音山ハ高崎市唯一ノ名勝ニシテ市ノ西南端ニ位シ、山勢高峻ナラズト雖モ平野ニ崛起スルガ故ニ眺曠頗ル雄大、而シテ桜花爛漫トシテ彩霞ヲ漂ハシ、秋ハ紅楓燦然トシテ錦繡ヲ織リ四時ノ風趣窮マル所ナリ……同志相謀リ観音山公園保勝会ヲ組織シ観音山公園造成ノ遂行ヲ促進スルト共ニ将来更ニ其ノ開発宣布ニ努メテ市及県ノ繁栄ニ資スル所アランコトヲ期ス、……。

趣旨の内容は、「観音山は高崎で唯一の名勝であり、眺望がきくだけでなく、春は桜、秋には紅葉が美しい景勝地である。これを観光地とするために、有志が集まって話し合い、観音山公園保勝会を組織した。観音山公園の造成を促進するとともに、将来の開発や宣伝に努めることで、高崎市および群馬県の繁栄に貢献しようと考えている」、このように要約することができます。

その翌年の昭和9(1934)年に井上保三郎は、群馬県でおこなわれた陸軍特別大演習に際し、昭和天皇に単独拝謁の栄誉を受けたことを機に、白衣観音像の建立を決意しました。戦没者の冥福の祈願と国民思想の善導などが発願の理由でしたが、観音山の観光開発も視野に入っていたようです。昭和11(1936)年、白衣大観音像が完成しました。同じ年、観音山の山続きになる金沢山に、呉服商の山田徳蔵が私財を投じてかねてより建設中だった洞窟観音も、ついに完成します。近接した場所には、「楽天山徳明園」と命名された公園も完成し、一般公開されました。

観音山が観光地としての形を整えていく中、昭和12(1937)年3月に、観音山一帯の景勝地の開発宣伝を目的とする「高崎観光協会」が商工会議所に設立されました。ベルリン・オリンピックの4年後に開催が予定されていた東京オリンピックを見据え、外国人観光客の誘致に本格的に取り組むためでもありました。戦争によってオリンピックは中止されましたが、白衣大観音像建立の経済効果を参詣者数等をもとに推計したり、土産物品展覧会を開催したりするなど、高崎の観光振興に注力しました。

同年3月、都市計画群馬地方委員会が、観音山を「高崎都市計画風致地区」に指定します。市の発展に伴って「俗化」することが危惧され、その防止の策が講じられたのです。昭和17(1942)年、高崎市が北関東における交通の要衝であり古くから商業が発達し、さらに重工業の進出がめざましいにもかかわらず、「市民ノ保健休養ニ資スベキ公園に乏シキ」という理由から、風致地区に指定した観音山の緑地を「都市計画公園」に決定し、整備していくことも決まりました。

第2節 戦後復興と新日本高崎こども博覧会

第二次世界大戦後の昭和23(1948)年、商工会議所に「社団法人高崎観光協会」が設立されます。総代は小島市長でした。協会は、市の観光計画の基本を樹立し、観音山一帯の開発計画や市内の観光施設の整備を進めるとともに、観光関係の官庁や諸機関、関係会社、宣伝機関と連絡して「観光高崎」を広く宣伝し観光客の誘致を図り、行事やイベントへの協力や観光事業に関する調査・研究・報告をすることを事業計画に掲げました。

昭和 26 (1951) 年 8 月、高崎市は「日本子供博覧会の創設者」とも称される日本厚生施設株式会社の三上隆彦の企画案をもとに、市議会の常任委員会で観音山約 3 万坪を舞台とする「こども博覧会」の開催を検討しました。9 月に市議会の全員協議会を 2 回開いて三上の詳細な説明を受け、検討を重ね、28 日の臨時市議会において「こども博覧会の開催要綱」が満場一致で可決され承認されました。主催は群馬県、群馬県教育委員会、高崎市の三者で、開催の目的は、「講和新日本の発足と国鉄高崎線の電化開通を記念し次の世代を担う子供の福祉を増進し、その文化的素養を涵養するとともに観音山公園一帯の観光地に特殊性を与え観光高崎を全国に紹介する」ことと「要綱」に記されています。

昭和 27 (1952) 年 4 月 1 日、会期を 50 日間とする「新日本高崎こども博覧会」が、ついに現実のものとなりました。前日の高崎市民新聞で、小島市長は次のように述べています。

……。平和国家文化日本の次の世代をうけつぐこどもたちを、元気で明るく育てるにはよい遊び場が必要です。そこで観音山一帯を永久的な遊園地にするにきまり、その第一歩としてこのこども博を催すのです。私は昨年米国で開かれた M R A (Moral Rearmament) 世界大会に出席しましたが、その際あちらの近代的なこどもの遊び場や新しい遊器具を沢山見学してきました。文化教育に大切なこれらの施設をこんどの計画にも十分とり入れました。……。

上毛新聞によると、昭和 27 年 4 月 1 日午前 8 時、小雨が降りしきる中、花火を合図にこども博が開幕しました。1,000 人以上の来賓を野外劇場に迎えた開会式では、高崎高校吹奏楽団の伴奏によって、ボーイスカウトと片岡中学校の生徒らが「こども博の歌」(峰潮路作詞・浜欽哉作曲)を披露しました。

みんな行こうよ、ラランラン。山は楽しい、こども博。アメリカ館や世界村、ひとめで見える飛行塔。花も笑うよ、ラランラン。山は楽しい、こども博。スリル愉快的ボブスレー、象さんお目見得、ごきげんよう。鳥も歌うよ、ラランラン。山は楽しい、こども博。びっくりスタジオ、テレビジョン。お猿の豆汽車、ごあいきょう。

この歌を、今でも覚えている人がいます。小学 3 年生の頃にこども博を経験した茶舗水村園の四代目当主小見勝榮さんです。「さあさ行こうよ、ラランラン。山は楽しい、こども博。みんな仲良し、お友達。観音様も、うれしそう」。4 番の歌詞を、歌って聴かせてくださいました。

こども博にどのような施設や遊戯機械があったのかは、「こども博の歌」から部分的に伺い知ることができます。全容は、当時の上毛新聞や高崎市民新聞の記事で紹介されていますし、『高崎市史』には案内図「新日本高崎こども博覧会 並高崎市街・ちょうかん図」もあります。この案内図を描いたのは、ブルーノ・タウトの高崎時代の弟子とされる水原徳言でした。また、児童雑誌『太陽少年』の

同年4月号の附録は「高崎こども博覧会めぐり」という双六仕立ての漫画でした。これらの資料を総合し、情景を想像しながら案内図の数字を順にたどってみたいと思います。

①会場入口には、「真っ白に塗ったオトギのお城が正面入口にあり、桜のトンネルをくぐって三百余の石段を上る」と、②清水寺に着きます。清水寺の広場には③温泉観光（郷土）館があり、東日本の温泉地が一目で分かる仕掛けです。④観音せんべいを売る売店と⑤射的のできる遊技店が並んでいて、⑥小鳥村は「松林の中に白い可愛いお家を作り、小鳥の楽しいねぐら」になっています。小鳥村の隣には⑦遊園地がありますが、それは「ブランコやオスベリなどを、全市を見下ろしながらゆらゆらと楽しめる」遊器具でした。

⑧会場に設けられた歓迎のアーチには、英語で「EXPOSITION FOR CHILDREN」（こども博覧会）と書かれています。アーチをくぐると⑨アメリカ館が見えてきて、長さ150メートル以上の本物のアメリカ軍輸送機の胴体から館内に入ります。「ニューヨーク、世界一高いエンパイヤビルを始め、ずらりと並んだ高層建築、ワシントン国会議事堂」を見上げながら歩いていくと、「機械王国アメリカが誇るフォード自動車会社の模様」の展示があります。「コンペアーシステムで自動車が次々に出来るのが一目でわかる」のが特長です。そのほか、「機械化農業の風景、油田地帯、ロングビーチの美しさ、動物たちが放し飼いされお客さんに呼びかける大国立公園、お花畑に牧場、ウィルソンの天文台、カウボーイの生活、アメリカの学校や家庭、赤十字社の活動、TVAの様子、映画の都ハリウッドの夜、アメリカインディアン姿、ハワイのワイキキの浜でフラダンスを踊る若者など、アメリカのことがみんなわかって」勉強になります。また、飛行機の「キャビンからの眺めはまるで大空を飛んでいる感じ」がします。

平和塔広場に⑩平和塔があり、巨大な⑪広告塔の横に、⑫大飛行塔があります。これは「東洋最初の三段型大型飛行塔」とされ、「ロッキード式二本胴の飛行機が四機。各機6名が乗って、15メートルの高い鉄塔から吊されて電気仕掛けで春のお空をブーンブーンと旋回」します。滑走路の下は展望台で、その下は売店です。

紅梅が咲く坂道をのぼると、⑬かわらけ投げをするところがあります。眺めのよい場所から、子どもたちが「かわらけ」を投げ競うのです。「お山の上からワンツースリー、かわらけ投げは100メートルも飛んで愉快愉快」と本当になるのか、眼下には25メートル、30メートル、50メートル、100メートルなどの標示が白く浮き上がっています。なお、この遊びは、自分で願いごとを書いたり、予め「厄除け」などと刻印されていたりする天日干しの土器または素焼きの皿を、崖下めがけて投げると願いごとが叶うとか厄除けに効くなどとされます。もともと社寺境内地でおこなわれていた願掛け・厄除けのようですが、これを遊園地に持ち込んだ前例には、向ヶ丘遊園などがあつたようです。

坂道をさらにのぼると、「やさしいまなざしでよい子を手招いている」白衣大観音像が境内に立つ⑭慈眼院に至ります。その横には「若き世代最大関心事の一つ」である⑮テレビジョン館があり、「電波科学の花形テレビで東京からの電

第1図 新日本高崎こども博覧会 並 高崎市街・ちようかん図 (部分)



出典：『新編高崎市史資料編 11』口絵②

波を受像」しています。⑯教育文化館は観音様広場に位置し、社会科の勉強として鉛筆の製造過程を見学できます。⑰売店が軒を連ねるその奥には⑱西入口があり、ハイキング道につながっています。観音山の一番高い場所にある⑲望遠台には、大型望遠鏡が4台設置されていました。

坂道を下って、記念たばこを売る⑳たばこ館を通り過ぎると、ハリウッド・ホールを真似たという㉑大野外劇場です。収容人数は約1万人で、大自然の中で各種の演芸がおこなわれます。向かいにある大きな㉒アーチをくぐると、三角塔の㉓産業館では郷土の産業（繊維業）の展示や、「飛行機が離着陸し、ロケットが飛び、各家庭にベルトコンベアーで食糧を運ぶ百年後の大高崎市」の模型を見ることができます。㉔郵政電通館は、「世界の友と結ぶ郵便友の会の活躍や、張り巡らされた通信網、電波の流れるのを楽しみながら隣の電気通信館に入る」造りで、電通館のほうには「科学に志す子どもたちを夢中にさせることばかり」があって、わくわくします。

㉕こども保険館、㉖食品館の次は、動物村です。㉗象の舎、㉘熊の舎、㉙鳥の舎、㉚猿ヶ島、㉛鹿の舎、さまざまな動物に子どもたちは大喜びですが、一番の人気者はタイから贈られた「象の高子さん」です。子どもたちを背中に乗せて歩いてくれました。

㉜交通館には本物の汽車が展示されています。㉝地球館は「まんまるい建物で、世界各国の風俗人形などがならべられるところ」でした。「わずか10分で世界一周ができる」という宣伝文句の㉞世界村には「アメリカのエンパイアビル、カナダのトーテムポール、セイロンのお寺、英国のロンドンブリッジ、イタリアのピサの斜塔、日本のお城」や「回教の寺院、南洋の呪物、エッフェル塔」が一列に並んで売店になっていて、キャラメルやおせんべいなどを買うこともできます。その向かいにも㉟売店があり、売店の横には「すごいスピード」で滑ることができる㊱おすべり台がありました。

㊲マデックハウスの「驚異を味わった子どもたち」には、㊳ボブスレッドの爽快感が待っています。これは、7人乗りの「ロケット弾型ボブ」が260メートルの山腹を滑走する「東洋最初の超大型遊器具」で、快速力でウェーブしながら、また蛇行しながら滑降するというスリル満点のアトラクションです。

小さな子どもたちは、「その下の㊴豆自動車にも群がるに違いない。これはひとりりで運転できる電気豆自動車だ」と予測する人もいました。もっと小さな子どもには、「音楽と共に馬が上下しながら回転する大型遊器具」の㊵メリーゴーラウンドが楽しいかもしれません。「軽いメロディに合わせて二十余頭のお馬が」走ります。㊶博覧会事務所は、メリーゴーラウンドのすぐ側にありました。

㊷びっくりスタジオで、心の底からびっくりしたら、次は先頭車両に㊸お猿が乗った列車の駐車場で、長い列に並びます。「お猿の列車は大人気。鉄橋渡り、トンネルくぐり、ピーピーポッポー、姿見の池を一回りする」。ちなみに、「お猿の列車」の元祖は、昭和23(1948)年に上野動物園で開通した「おサル電車」でした。あまりの人気から、日本中の遊園地で、子どもを乗せて走る豆電車は「お猿の電車」という愛称で呼ばれるようになりました。

④姿見の池の端でアシカにまたがり「手を振って遠いお空の雲を見上げる子ども像三体が平和を呼んでいる」姿をイメージした⑤彫刻像は、分部順治の作品です。最後に、⑥出口を出て駐車場に戻り、帰路に就きます。

こども博開催中は群馬バスの協力により、高崎駅から上毛新聞の特設館へ、観音山から特設館へと入場者無料サービスの案内がありました。県内だけでなく埼玉県や栃木県などの小学校・中学校からも数百人規模の団体客が訪れ、会場は子どもたちの笑顔であふれたということです。会期中の入場者は約50万人で、博覧会は大成功に終わりました。

5月20日に閉会した博覧会会場からは、ほとんどの施設が撤去ないし移転されましたが、大飛行塔、メリーゴーラウンド、お猿の列車といった遊戯機械と大小の遊器具、動物園はそのまま残され、同年7月10日から高崎市が「観音山遊園地」として運営することになりました。高崎市に、遊園地が誕生した瞬間です。観音山遊園地の案内図には、大飛行塔、メリーゴーラウンド、ボブスレッドといった遊戯機械、ブランコ、滑り台、シーソー、遊動円木などの遊器具、小劇場、地球館、世界村、姿見の池とお猿の列車、豆自動車、動物園には象の高子さん、シマウマ、カンガルー、テナガザル、シカ、クマ、イノシシ、クジャク、ツルなど、そして放し飼いのサルがいる猿ヶ島、さらに郵政館を改装した昆虫館(世界の1,500種類の珍しい昆虫を展示)が、写真と文章で紹介されています。

以上のように、第二次世界大戦後に開催された博覧会の跡地に遊園地ができたわけですが、実は博覧会と遊園地はとても親密な関係にあります。日本で初めて博覧会が開催されたのは明治10(1877)年8月、東京・上野公園の第一回内国勸業博覧会でした。明治時代の博覧会は、欧米で開催されていた万国博覧会を手本とし、近代的な認識の眼を養うための教化的・啓蒙的な場を意図していました。国家や自治体の勸業政策と結びついた物産展や、外国の優れた商品や先端的な技術を紹介する展示や実演など、生産者や製造業者が「競い学ぶ場所」だったので。これとは対照的に、会場の周辺すなわち「会場外会場」には娯楽と祝祭を求める人びとと、それを提供する人びとが集まり大変賑わいました。

大正時代になると、日本各地の都市で自治体や企業が主催する各種の博覧会が開催されるようになり、教化・啓蒙よりも娯楽・祝祭のほうに重点が置かれるようになります。それを裏付けるように会場で大きな場所を占め、人目を惹いたのが、飛行塔やメリーゴーラウンド、子ども列車などの遊戯機械でした。大正末には、子どもを主題にする博覧会も登場し、子ども向けの特設展示や子ども用の遊器具、「遊び場」も設置されました。

博覧会は大人のための啓蒙と勸業の場から、子どもや家族連れをターゲットにした娯楽と教育の場へと変化したのです。博覧会終了後に会場の規模を縮小しつつ遊戯機械・遊器具を残し、児童公園にする例は少なくありませんでした。「観音山遊園地」は、まさにこのパターンだったといえます。次章では、市営の遊園地が民営のフェアリーランドに衣替えし、さらにカップピアに発展して市民の憩いの場となった時代を見ていきます。

第2図 高崎観音山遊園地案内図



高崎市立中央図書館所蔵。

第2章 遊園地の黄金時代

第1節 「おとぎの国」フェアリーランド

市営の観音山遊園地は不景気などのために経営が悪化し、昭和35(1960)年3月に一時閉鎖になりました。そこで、遊園地付近に路線バスの営業権をもつ上信電鉄に対して委譲の申し出がなされ、12月に上信電鉄が全ての遊戯機械とともに観音山遊園地を買収し、翌年5月に「高崎フェアリーランド株式会社」が発足しました。『上信電鉄百年史』(以下、「上信社史」)には、次のような記述があります。

昭和30年代のはじめ、全国的に第1次観光ブームが起こり、各地で施設の開発と整備が進められた。高崎市でも観音山の観光の見直しと活性化の声があがり、昭和36年、上信電鉄に開発の要請があり、当社(高崎フェアリーランド株式会社)が設立され、遊園地の開発・整備が始まった。観音山は、高崎市の都市公園区域に指定されているため、当社は高崎市都市公園事業の一部として、県知事の特許を受けて発足し、会社成立の際は広く(社団法人高崎)観光協会の会員らから株式の募集を行い、市役所や観光協会からも役員を迎え、公共性を重視した運営に努めている。

昭和37(1962)年3月18日付の上毛新聞によれば、観音山公園開発計画は、昭和36(1961)年12月に県都市計画審議会で承認され、当時の建設省に特許事業の申請手続き中で、5月頃までにはめどが付く見通しとなったため、4月から「おとぎの国」の建設にとりかかることになったようです。この時点での事業計画では、昭和37(1962)年度は竜宮城、おとぎの城、桃太郎列車など、昭和38(1963)年度は遊園電車、休憩所など、昭和39(1964)年度は展望台、バーベキューセンターなど、そして昭和40(1965)年度にはモノレール、遊歩道を作る予定となっていました。「上信社史」には、開園までの経緯と、昭和37年3月30日の開園当日の様子が詳しく描かれています。

国内の主要な遊園地を視察し、アメリカのディズニーランドや奈良のドリームランドを手本としつつ、世界各地の寓話やおとぎ話の研究を行い、「フェアリーランド(おとぎの国)」構想を策定した。白衣大観音をはじめ、由緒ある清水寺や、全国的に珍しい洞窟観音のある観音山に立地する遊園地の特徴を生かして、フェアリーランドでは、仏教伝説や観音伝説のほか、さまざまな名作童話をモチーフとして取り入れている。キャッチフレーズは「スピードと高さ、冒険心とスリルを心ゆくまで楽しみながら、学習できる遊園地」となった。そして昭和36年(1961)7月、隣接する33,000㎡(1万坪)の土地を購入(一部借用)して敷地を拡張するとともに、5か年計画で着工された。翌37年3月には、1億円の予算を投入したメリーゴーラウンド、スポーツカーランド、観覧車、メリースクーター、バッテリーカー、ゴーカート、お猿の電車などの設置を含む第1期工事が完了し、3月30日に開園した。開園当日は、群馬県知事、高崎市長、市議会議員、市教育委

員会、観光協会などの関係者を招いて、敷地内の「ひろがる夢の丘」で開園式が行われた。赤、青、黄の無数の風船が大空に舞い上がった。社長も常務も関係者も、うれしさに泣いた。午後1時、数百人の一般客が入場し、遊戯機器が活動を始めた。この日は入園無料で一般公開され、特別招待された養護施設の園児50人をはじめ、園内は一日中行楽客であふれた。開園後も連日盛況が続き、行楽シーズン中に1日最高2万人の入園者を記録した。その後も、夏季の「納涼スリレーション」など人気のアトラクションを誕生させ、家族で楽しめる遊園地として地元に着していった。

フェアリーランドが開園した翌年の昭和38(1963)年、前橋市の前三百貨店、高崎市の藤五デパートが相次いで営業を開始します。いずれも日用品から高級ブランドまで幅広い商品を扱い、各階にはエスカレーターとエレベーターが設置され、レストランや屋上遊園地もありました。経済の高度成長期に入った日本では、人びとの暮らしが豊かになり、消費や娯楽がいつそう盛んになったのです。

第2節 「水の国」カップピア

「おとぎの国」フェアリーランドに「水の国」カップピアが増設され開園したのは、昭和44(1969)年7月15日のことです。カップピアには流れるプール(一周300メートルの大円形人工溪流サンリバー)とザブンコライダー(水の流れる大型滑り台)が設置されていました。流れるプールは当時の日本ではまだ珍しく、完成・開園は全国で7番目でした。オープン時、民放キー局の昼の番組が1週間、カップピアから生中継されたそうです。

「カップピア」という名前は「カップ・ユートピア」の略称で、懸賞募集して選ばれました。賞品は「トヨタカローラ」だったそうです。しかし、なぜ「カップ」なのでしょう。昔の写真を集めた大型本を読んでいたところ、夏に利根川とその支流で泳ぐ子どもたちのことを、カップと呼んでいたらしいことが分かりました。たとえば、『写真集 群馬の昭和』(2004年)には「カップ天国の夢」という項目があります。頁を開くと、利根川と渡良瀬川で水遊びをするたくさん子どもたちが、3枚のモノクロ写真に収まっていました。写真に付された解説文には、次のように記されています。

三十年代の初めまでは河川のいたる所で遊ぶ子供達のカップ天国があった。三十年代末になると経済開発などで環境が汚れ、河川はカップ天国の役割を失った。……。

3枚の写真のキャプションは、それぞれ「昭和初期の利根川のカップ天国」「渡良瀬川のカップ天国(昭和三十一年 桐生市)」「渡良瀬川綿桜橋下のカップ天国(昭和三十三年)」とあります。夏に利根川水系で泳ぐ子どもたちが、カップと呼ばれていたのです。利根川には「欄干子(ねねこ)」という河童の伝承もありますから、利根川水系とカップは不可分なのでしょう。フェアリーランドにカップピアが増

設されたのは昭和 40 年代ですから、この解説文に従えば、利根川水系で泳げなくなったカッパたちが、フェアリーランドの「カッパ天国」に遊びに来たのかもれません。

実際のところ、水の国カッパピアは、子どもたちに大人気でした。カッパピアといえばプールを思い出すという人も多いようです。夏休みには毎年、必ず一度は行き、朝から夕方まで一日中、水遊びをしていたということです。最初はプール施設を指していたカッパピアという名称が、やがて施設全体を指すほど浸透したため、フェアリーランドは運営会社の名前として使用されることになりました。

カッパピアが誕生した昭和 44 年、群馬テレビが開局し、46 (1971) 年から本放送が開始されました。群馬テレビで毎年、夏の全国高等学校野球選手権のシーズンになると流れていたのが、カッパピアのプールの CM でした。「待った、待った、夏休み。カッパピアは水の国。泳いで、遊んで、さあ行こう」。万寿屋の CM と並んで、群馬テレビの定番の CM のひとつでした。

フェアリーランドの時代からカッパピアの時代にかけて、遊園地とプールはリニューアルを繰り返しました。残っている数枚の園内マップを見比べると、施設や遊戯機械が次々と変化しており、来園者を楽しませようとする数々の努力と工夫に気がきます。昭和 49 (1974) 年からは、高崎市全戸に向けて「高崎市民特別優待証」が配布されるようになり、来園を促された市民も多かったと思います。どのような遊びや催しがあり、そこでどのような思い出が生まれたのか。世代や家族構成上の立場が違えば、アトラクションやイベントの体験や記憶も異なるでしょう。ここでは昭和 58 (1983) 年頃からカッパピアに勤めていた Y 氏をはじめ、現在 40 歳以上の方々のカッパピア体験をもとに、在りし日の風景を再構成してみたいと思います。

第 3 節 記憶の中の遊園地

1) プールサイドの華やかなステージ

流れるプールの横には、立派なステージがありました。毎週日曜日は「カッパピアちびーずオンステージ」というイベントがあり、園内放送で開始のアナウンスが流れると、大勢の人がステージ前に集まったそうです。「ちびーず」とは、小中学生を中心としたカッパピア専属のアイドル・ユニットで、大人顔負けの歌と踊りで人気を博しました。ショーの後半に、観客に向かってカラーボールを投げることもありました。ステージを見て、ちびーずのメンバーになりたいと言い出す子どもたちもいたそうです。しかし、メンバーになってステージに立つのは容易ではありません。オーディションがあり、レッスンも厳しかったといえます。それでも、レッスン後はカッパピアで遊ぶ楽しみがあったそうです。

プールの時期には芸能人を呼んで、盛大なコンサートが開かれました。芸能人にオファーを出すのは前年度の予算編成時期、つまりその年の 2 月頃でした。コンサートは夏休みですから、オファーを出したときはまだ売れていなくて出演料が安かったのに、夏休み前にブレイクして大スターになったという、ミラクルな

第4図 カップピアのパンフレット

カップピア

施設のごあんない

のりもの

施設

- ① 正出入口
- ② 車寄せ(団体客専用(送迎室))
- ③ 観覧車
- ④ 島のまわり
- ⑤ 観音橋口

プール

- ① サーフスタワー
- ② ショップジャブビッチ
- ③ スターシ
- ④ サイト西浜店

売店

- ① 中央飲食コーナー
- ② 松山店
- ③ 観音橋
- ④ レストラン
- ⑤ パワール

乗れるアール
(1歳900m)

- ① とびこるアール
- ② ルーヴアライガ
- ③ シェアフロウカー
- ④ 雲玉なるアール
- ⑤ 波のゆるアール

乗れるアール
(身長110cm以上)

- ① ツイスター
- ② パラトルーパー

乗れるアール
(身長110cm以上)

- ① ベンがい号(5分乗)
- ② 海賊船
- ③ パットゴルフ
- ④ メルヘン殿
- ⑤ ゲームコーナー
- ⑥ 船河鉄道
- ⑦ ミニバイク(バッテリー)

乗れるアール
(バッテリーカー)

- ① メルヘンボックス

乗れるアール

- ① メリゴーランド
- ② わくわくランド
- ③ ビックリハウス
- ④ ケアハウス
- ⑤ 観覧車
- ⑥ ビックリ迷路
- ⑦ 豆自動車
- ⑧ メルヘンボックス

乗れるアール

- ① ゴーカー
- ② サイクルモノレール

乗れるアール
(身長105cm以上)

- ① シェットコースター
- ② ツインドラゴン

乗れるアール
(身長105cm以上)

- ① 宙返りジェットコースター

乗れるアール
(身長105cm以上)

- ① 互転音山頂

乗れるアール
(身長105cm以上)

- ① フラッシュダンス

乗れるアール
(身長105cm以上)

- ① ジェットコースター
- ② アラビアンメリー

乗れるアール
(身長105cm以上)

- ① ジェットコースター

乗れるアール
(身長105cm以上)

- ① ジェットコースター

芸能人もいたそうです。その大スターとは、西城秀樹でした。コンサート当日は大変な騒ぎとなり、臨時に入場門を2カ所増やして対応しました。他にも、にしきのあきら、萩原健一、山口百恵、フィンガー5、館ひろし、いいとも青年隊など、多くの芸能人が来園したようです。

2) 3種類のジェットコースター

ジェットコースターは3種類ありました。昭和41(1966)年に完工したジェットコースターと、昭和55(1980)年に増設された宙返りジェットコースター、そして昭和58(1983)年に設置されたジャングルマウスです。シャトルループとも呼ばれる宙返りジェットコースターは、当時日本一の高さを誇り、白衣大観音像をループの中に納める写真で有名になりました。当初は500円の専用券を購入しなければならず、値段が高いとして敬遠されることもあったため、普通の回数券でも乗れるようにしたそうです。建設費が高額だったうえに維持費もかかることから、地元企業である「富士オート」をスポンサーとしました。宙返りジェットコースターの入口付近のテントに富士オートの文字が刻まれ、富士オートが販売する乗用車が展示されていたのはそのためです。宙返りジェットコースターの入場者20万人目突破の記念日を当てるクイズの賞品も、スバルの「FFレックスコンピFタイプ」でした。

宙返りジェットコースターの維持費は、スポンサー企業に頼ることができたものの、乗り物券を値下げしたため、建設費を回収することは難しくなりました。そこで3つめのジェットコースターであるジャングルマウス設置の際には、テナント方式を採用しました。ジャングルマウスは2人乗りのコースターが、ほぼ直角に曲がったレールの上を走ります。速度と衝撃で、ずいぶんと迫力があります。これも最初は300円の専用券を購入して乗る方式だったのですが、やがて普通の回数券でも乗れるようになりました。

カップピアの3つのジェットコースターを比べると、遊園地には①事業者が設置し運営している遊戯機械、②事業者が設置した遊戯機械をスポンサー企業からの広告料収入で維持し運営しているもの、③遊戯機械メーカーやイベント会社が場所を借りて運営するテナント方式、という3つの形態があることが分かります。

3) お化け屋敷

カップピアの従業員の間では、お化け屋敷を「催事館」と呼んでいました。内装を変えることで、いろいろなアトラクションに対応できる建物だったのです。お化け屋敷には、ジレンマがつきものです。怖すぎると、お客さんが入ってくれない。怖くなさすぎても、お客さんは来てくれない。カップピアも例外ではありません。最初の頃、お化け役を担当していたアルバイトの男子学生が、女性客をあまりにおどかしすぎて問題となり、中止になったそうです。その後、怖くないお化け屋敷となったのですが、今度は怖くないことが問題視されました。その結果、本格的なお化け屋敷をつくるため、プロの力を借りることになります。遊園地業界ではかなり有名な栃木県佐野市のお化け屋敷製作会社「丸山工芸社」がテ

ナントで入ることになったのです。

プロが作ったお化け屋敷、いったいどのようなものだったのでしょうか。記憶の断片や印象に残っていることを語ってもらいました。中に入ると真っ暗で、本当に何も見えなくて怖かった。床が斜めで、ふにゃふにゃだったため、壁に手をつけて体を支えていないと前に進めなかった。白っぽいものが、内側をすーっと動いていた。白い仮面のようなものが壁面に取り付けられていた…。

丸山工芸社は、現在も多くの遊園地でお化け屋敷を手がけています。県内では、渋川スカイランドパークのお化け屋敷が丸山工芸社のテナントです(2019年現在)。カップピアでの恐怖を、渋川スカイランドパークで再び体験できるかもしれません。なお、催事館はさらにリニューアルされ、最後はメルヘン館となって、「ピーターパン おとぎの家」として演出されました。

4) 弁慶号 (舌切り雀)

弁慶号は、姿見の池の周辺を走る豆汽車です。前身は、こども博覧会の時のお猿の列車で、博覧会終了後も、そしてフェアリーランドになってからも、遊園地に動物園があるうちは先頭車両にお猿が乗っていました。その後は、お猿のぬいぐるみに乗せて走った時期もありましたが、リニューアルして弁慶号となりました。

弁慶号の乗り場の入口には大きな丸い頭の和服姿の雀がいて、人が通るたびに「いらっしゃいませ、いらっしゃいませ」と繰り返します。雀に誘われて豆汽車に乗り込むと、舌切り雀の物語が始まり、トンネルに入ります。暗くて低い語り声、微妙な表情のお爺さん、山姥のような形相のお婆さん、雀は人間とほぼ同じ大きさで、まるで妖怪…、多くの人が怖かったという印象を持っていました。トンネルを抜ける頃には、欲が深いと怖いめにあうよというメッセージのもと、つづらからお化けが飛び出します。そのお化けも不気味だったそうです。昭和55(1980)年頃の資料では、舌切り雀はスリラーショーというジャンルになっていました。怖いはずです。社員だったY氏も、入口の雀の前を通る度に、「こりゃあ、子どもは怖いだろうな」と苦笑いしていたそうです。

5) ビックリハウス

ビックリハウスは、日本の遊園地業界を牽引した遊戯機械メーカーのひとつ東洋娯楽機製作所(現在の株式会社トーゴ)が開発したアトラクションです。ハウスの中に入って長椅子に座ると、室内の壁と椅子が揺れ始め、逆さ吊りになったような感覚に襲われます。小学校の遠足でカップピアに遊びに来て、喜んでこれに乗ったところ、揺れが激しくて怖かったとか、乗り物酔いをしたとか、強烈な印象を持っている人が大勢いました。フェアリーランドの最初期からカップピアの最後まであったアトラクションのひとつです。

6) 絶叫系とファミリー系の遊戯機械

「上信社史」によれば、平成になってから新たな遊戯機械が次々に設置されました。平成3(1991)年にツインドラゴンとアラビアンメリー、平成4(1992)年

にツイスターとパラトルーパー、平成5(1993)年にはフラッシュダンスという具合です。のちにサイクルを漕ぐと上昇するバルーンサイクルも加わりました。

7) その他のアトラクション

母の手像の少し先に、ケーブルカーの乗り場がありました。その横にあったビックリ迷路は、遊戯機械・遊器具の修繕・整備を担当していた従業員が中心になって設計し、材料を購入して、みんなで組み立てた手作りのアトラクションでした。

ケーブルカーは、観覧車の乗り場につながっていました。途中にジャングルマウスなどの遊戯機械が段々畑のように配置され、最も高い場所に観覧車がありました。歩いても行ける距離ですが、ケーブルカーのほうが早く楽に見晴らしのよい場所に到着できます。晴れた日の眺めは格別だったそうです。このエリアには、サイクルモノレールやゴーカート、豆自動車もありました。また、メリーゴーラウンドは、平成6(1994)年にリニューアルされました。

母の手像から白衣大観音像のほうに向かうと、海賊船がありました。内部にはジャングルジムがあり、滑り台で降りてくることができます。無料の遊具なので人気があり、小さい子どもたちもたくさん遊んでいました。すぐ横には大人が楽しめるパットゴルフがあります。花壇のあった場所に、従業員が手作りしたものだそうです。この向かいにはメルヘンボックスがありました。エアー遊具にボールプールなど、室内型の遊び場です。そこから右手にティーカップやフラッシュダンスを見ながら先へ進むと、お化け屋敷がありました。その裏手にあったのは、ソフトボールの弾を込め、エアーでスパーンと山に向けて発射するバズーカ砲でした。バルタン星人が標的だったこともあったようです。さらに、姿見の池のほうに向かう途中に、銀河鉄道やミニバイク、トリッピングカーがありました。

8) プール

カッパピアの流れるプールは、子どもたちの間でブームを巻き起こしました。ある小学校のプールでは、みんなで一齐に同じ方向に歩いて渦をつくり、流れるプールの真似ごとをしたそうです。流れるプールの内側には、ラグーンのようにぽっかりと子どもプールがあり、外縁にはもっと小さい子どもたちのために、築山に登って滑り降りて遊べる遠浅のジャブジャブビーチがありました。途中で設置された飛び込みプールは走って飛び込むタイプで、ふざけて飛び込んで血だらけになった若者もいて、従業員が医者に連れて行く騒ぎとなったそうです。昭和62(1987)年に増設された露天ぶろプールは、冷えた体を温めるために水温が約36度に設定され、周囲には植え込みもあり、長湯をする人も多かったそうです。平成元(1989)年には、波の出るプールとループスライダーが増設され、カッパピアのファンはさらに熱狂しました。

プールのランドマーク的な施設であるサービスタワーは、迷子の案内をしたり、貴重品を預かったり、公衆電話が置かれたりなど、インフォメーションセンターとして機能しました。最も忙しいのは夏季、日曜日の午後から月曜日の午前だったそうです。忘れ物の問い合わせの電話が多かったからです。繁忙期は、大きな

ビニール袋5つ分の忘れ物があることもあり、現金や貴重品は見つけた時間や場所なども含めて記録したそうです。そのあと、警察に届けたり、問い合わせの電話に対応したり、忘れ物を預かるのはとても大変な仕事でした。

市営のプールはアルコール禁止でしたが、カッパピアではビールを売っていたので、大人にも人気がありました。また、売店では温かい食事を提供していました。どの遊園地・テーマパークでも、寒い季節の集客は大きな課題です。そこで昭和58(1983)年11月、冬のプールを有効活用するため、鉄板を張って水を流して電気で凍らせ、アイススケートリンクの営業を始めました。プールでもスケートでもない季節には、足漕ぎボートやモーター付きのボートを浮かべていたこともありました。

9) レストランホールでの催し

ほかには、どのような営業努力があったのでしょうか。カッパピアには軽食・スナックを売る店と立食の店以外に、食事のできる場所が3カ所ありました。そこで、レストランホールと松山苑を団体昼食に使ってもらうことを考え、旅行代理店に売り込みました。ドライブイン方式で、静岡など遠方からのバス旅行者に、水上温泉や伊香保温泉の帰りに立ち寄ってもらい、白衣大観音像の拝観後にカッパピアでお昼ご飯を食べてもらおうという計画です。往路だとお土産を買ってもらえないので、できるだけ復路のバス客、関越自動車道の前橋ICか高崎ICを使って帰路に就こうとする観光客を呼び込もうとしたそうです。団体客誘致のメリットは、同じ時間に同じメニューを人数分、前もって準備することになるため、効率がよいことです。また、自由時間に遊園地で遊ぶ人には乗り物券を買ってもらうことが期待できました。そこで、大人が遊べるようにパットゴルフを設置したのだそうです。宙返りジェットコースターも、この流れで設置が決まったといいます。

さて、カッパピアのレストランホールでは、何百組もの結婚式・披露宴がおこなわれました。ホールには神前結婚式の設備があり、神職に出向してもらって式を挙げていました。神職は毎年、プール開きやスケートリンク開き、さらには遊戯機械のリニューアル時などでも清祓の儀式をおこなったそうです。カッパピアで結婚式・披露宴がおこなわれた背景には、レストランホールの有効活用という経営側の戦略だけでなく、市内に結婚式場が少なかったという事情がありました。結婚式といえば高崎神社かカッパピア、といわれる時代があったのだそうです。昭和62(1987)年に大類町にウェディングホール「グランドパティオ高崎」ができてからは、結婚式場やホテルでの結婚式が当たり前になっていきました。

このレストランホールでは、おもに高校生を対象としたテーブルマナー講座も開催されました。また、新年会、歓送迎会、納涼会、忘年会など、季節ごとに各種の宴会の予約を受け付け、送迎用の大型バスで市街地と観音山を往復したということです。さらに、レストランホールにはカラオケの機械も設置され、カラオケ大会が開催されました。食べて飲んで歌う予選会をカッパピアでおこない、本大会は音楽センターや県民会館で遠藤実などの有名な作曲家を審査員に呼んで開

催し、群馬テレビで生中継したのです。カラオケ・ブームだった当時、カラオケ教室が県内のあちこちで開かれ大盛況でした。予選会には、そうしたカラオケ教室の先生が、生徒を腕試しにと連れて来たそうです。

10) 写生大会・遠足とお土産

カッパピアでは、毎年4月に高崎市の写生大会がおこなわれていました。この行事は市営遊園地の時代の昭和32(1957)年に始まったもので、市内各地の育成会・子供会の小学生と保護者が集まり、写生が終わった子どもから遊園地で遊ぶことができました。高崎市内外から、もっと多くの子どもたちに遊びに来てもらえるよう、Y氏は粗品の竹箒とタオルを持って小学校・幼稚園・保育園などをまわり、遠足用のパンフレットを配りました。幼稚園や保育園の場合、保護者同伴なので、お土産の売上も期待できます。お土産用のお菓子や玩具、子どもに人気のある戦隊シリーズのグッズなども、分かりやすい場所に置いてアピールしたそうです。

カッパピアは、入ってすぐに売店があります。そして入場券を買う場所があり、その奥が事務所になっていました。この構成には理由があります。お客さんがまずお土産を見て、そのあとで入場券を買って園内で遊び、最後に気になっていたお土産を買ってから帰るという導線をつくったのだそうです。考えてみれば、各地の遊園地・テーマパークが同様のつくりになっています。テーマパークの場合とはくに、ほとんどのアトラクションでそのアトラクションに関連したグッズを置いたギフトショップを、アトラクション終了後の興奮さめやらぬ状態で通過するという構成です。

カッパピアにはオリジナル・グッズはありませんでしたが、小さくて可愛らしいカッパのぬいぐるみを仕入れて売店に置いていました。これは小学校の遠足などで来た子どもたちに買ってもらうためでした。小学校高学年になると、予算500円程度の買い物の練習もするようになるため、ぬいぐるみの値段は300円に設定したそうです。高崎問屋町の玩具店からは、30～50円の消しゴムを仕入れて置いていました。これを3つ買うと90円になるとか、2つで100円になるなど、買い物や計算の練習・勉強になるというので好評だったそうです。

11) 年中行事と四季折々の花々

カッパピアでは、季節を感じさせるイベントもありました。1月15日の小正月の朝、社員は6時に出勤し、パートの女性たちと一緒に上新粉を練って繭玉の団子を作ったそうです。切ってきた枝の先にくっつけて、1本500円くらいで売りました。園内ではどンドン焼きまつりをして、正月飾りのお焚き上げをしました。

観音山は桜の名所です。春になるとソメイヨシノはもちろん、沖縄県名護市の名産のヒカンザクラ(緋寒桜)がきれいな花を咲かせました。昭和62(1987)年に始まった「緋桜まつり」では、社員も法被を着てイベントを盛り上げたそうです。名護市からキャンペーンガールが来園した年もありました。

3月末から5月末の「フラワーショー」は年中行事でしたが、園内ではいつも

何かの花が見頃を迎え、咲き誇っていました。3月はクロッカス、水仙、ヒヤシンス、チューリップ、4月は引き続きチューリップと桜、アルメリア、芝桜、5～6月はツツジ、サツキ、花菖蒲、藤、バラ、アジサイ、ライラック、7～9月はサルビア、マリーゴールド、ハイビスカス、美女桜、日々草、ランタナ、アメリカ芙蓉、10～11月は菊、桔梗、萩、もみじ、12～2月は葉ボタン、寒椿といった具合です。さらに、11月は靴を履いたままで競う少年剣道の個人戦も、毎年開催されていました。

12) 動物園

こども博に由来する動物園は、市営の遊園地からフェアリーランドへと引き継がれ、昭和40(1965)年頃までであったそうです。昭和51(1976)年にオープンした「お猿の国」ではサルを放し飼いにし、飼育員が芸を教えて披露していました。小動物ふれあい広場は、移動動物園の業者によるテナントでした。

ホワイトタイガーなど白い稀少動物を目玉にした移動動物園やサーカスなどの公演を、大駐車場の特設会場で開催したこともありました。その入場券を提示するとカップピアの入場料が割引きになる、逆にカップピアの入場券を提示すると移動動物園の入場料が割引かれるという特典もつけましたが、期待したほどの集客はできませんでした。「メイン(遊園地)に魅力がないと、お客さんは来てくれないんだな」とY氏は思ったそうです。

第3章 カップピアからケルナー広場へ

第1節 カップピアの閉園

カップピアの末期は従業員が減り、少ない人数で担当場所を掛け持ちしていました。チケットを切る「もぎり」が、お客さんを追いかけて走り回り、遊戯機械を操作しました。カップピアの場合、遊戯機械の種類が多かったため、全てに精通し操作できる人はおらず、従業員を減らすにも限界がありました。始業点検には専門性も必要です。宙返りジェットコースターの担当者は、毎朝、ループの一番上に乗って異常がないかを調べました。Y氏は「事故を起こさないためには、人件費は削れない。一人で何でも動かせる規模と遊器具だったら、カップピアは長続きできたのに」と本気で思ったことがあるそうです。「平日だと、お客さんが何組も来ないんだから、後をつけて回って、マルチに動かせる人が一人いればいい」。

カップピアに「水の国」ができた昭和44(1969)年度、来園者は約62万人でした。しかし、これをピークに来園者数は年々減少していきます。平成2(1990)年度に29万人、平成10(1998)年度には9万人と激減して、経営不振に陥りました。周辺道路の渋滞や混雑を緩和するため、大規模駐車場を自前で増設したことも、資金繰りの悪化につながっていました。遊戯機械や施設の老朽化も進み、存続は困難になっていきます。

平成15(2003)年11月11日、11月末をもって閉園することが発表され、各種のメディアも一斉にこれを報道しました。皮肉なことに、カップピアには久々

に賑わいが戻り、子どもたちの笑い声が響き渡りました。16日からは入園料半額などの「さよならイベント」が行われ、22日からは入園料が無料となり、フリーパスも割引となりました。11月30日の最終日は園内が無料で開放され、アトラクションに行列ができました。翌日の上毛新聞によると、最終日は4,000人以上が訪れたということです。

平成16(2004)年2月9日、高崎フェアリーランド株式会社は前橋地裁高崎支部に自己破産を申請し、2月19日に破産宣告を受けました。同年7月、都市公園の廃止が公告されます。閉園後、土地の所有関係が複雑だったことなどから債権問題解決が進まず、立入り禁止の園内は徐々に荒廃していきました。たびたびの無断侵入によって施設や遊戯機械が破壊され廃墟化が進むと、テレビやインターネット、書籍などで悲惨な状態が晒されました。興味本位の立ち寄りや廃墟観光者の関心を惹き、さらに無断侵入が増えるという悪循環が始まります。市民や報道機関などからは、犯罪の温床になりかねないという指摘が再三ありました。壊れていくカッパピアの様子をインターネット上で見つけ、悲しむ人が大勢いました。「みんなを幸せにしてくれた人(会社)が破産するなんて納得できない」という書き込みもありました。辛そうに、時に楽しそうに、当時のことを教えてくれたY氏の顔が思い浮かびました。

第2節 カッパピア跡地の整備計画

平成19(2007)年1月23日夜、かつて入場券売り場や売店のあった鉄骨平屋建ての建物が、放火とみられる出火で全焼しました。これを受けて翌日、高崎市は高崎フェアリーランド株式会社が所有する土地・建物・遊器具等を買収する方針を表明します。金融機関(債権者)との協議の末、抵当権抹消で合意し、8月末、高崎市への移転登記が完了しました。解体撤去工事は同年7月に開始され、10月には「第一回観音山公園(カッパピア跡地)再整備検討委員会」が開催されました。再整備検討委員会は平成20(2008)年12月までにさらに6回おこなわれ、学識経験者や行政機関の職員、周辺関係住民と公募による一般市民らにより、検討が重ねられました。検討結果は平成21(2009)年3月、『観音山公園(カッパピア跡地)基本計画書』という冊子にまとめられました。

基本計画書で示された「計画テーマ」は「観音山ネイチャー・フィールド～観音山丘陵の懷で、子どもたちを育み、人々が四季の自然を満喫する〈ネイチャー・フィールド〉」、基本方針は「カッパピア跡地を観音山丘陵の中心的核施設と位置づけ、現況の跡地の地形や起伏、樹林等の自然環境を有効活用した、自然に触れ合える公園づくりを基本コンセプトに、子供からお年寄りまでの多くの人たちが広く交流できる、ならびに憩える公園として再整備を行う。特に学校等と連携を図り、子供たちが自然環境と触れ合える場として整備するとともにソフトの充実を図る」というものでした。

基本計画書に沿って、平成22(2010)年から公園の整備が進められていきます。基本計画書では、広大な面積(約153,000平方メートル)を「エントランス広場」「桜の広場」「紅葉の谷」「お花畑」「ゆうゆうの丘」「流れ・池」「はぐくみの丘」「竹

林の里」「ふれあいの森」「駐車場」といった10のゾーンに分けたうえで、それぞれの場所の地形や現況の特性に合わせて整備することが構想されていました。これらのうちの「はぐくみの丘」は「自己責任で積極的に遊べ、自然とのふれあいを大切にしたいゾーン」であり、「市民主体の管理運営を目指す」もので、「リーダーハウス」や「創作遊具」が導入される予定でした。ところが、計画とはずいぶん形を変え、このゾーンがケルナー広場となったのです。

第3節 ケルナー広場の開園

平成25(2013)年8月、高崎市はカッパピア跡地で進めていた公園の整備計画について一部を変更し、ドイツの世界的遊具メーカー、ケルナー社の遊具を設置したケルナー広場として整備していく計画を発表しました。南東部分の丘、約5,000平方メートルが対象で、平成26(2014)年度に、2年後の完成を目指して着工しました。そして、平成28(2016)年3月26日、ついに「子どもの遊び場」ケルナー広場が開園したのです。

ケルナー広場には、童話「ヘンゼルとグレーテル」のお菓子の家をテーマにした高さ5メートルの複合遊具や長さ約10メートルのトンネル型滑り台、鳥の巣ブランコなどの遊具が並んでいます。夏に水遊びができる漏斗型の遊具や、日よけ付きのベンチも配置されました。ケルナー社の遊具は、不均衡で斬新なデザインと構造が特徴で、子どもたちが遊び方を創造し工夫することができるといわれます。たとえば、滑り台の階段が斜めで、のぼり棒がぐらぐら揺れます。危険に感じるこのつくりが、子どもの冒険心を駆り立て、危険予知能力や、事故回避能力を高め、体力、運動能力の向上を促すというのです。平成28(2016)年の「広報高崎」3月15日号に、遊具をデザインしたハンス・ゲオルグ・ケルナー氏のメッセージが掲載されています。

観音山公園の遊具は、ここだけのオリジナルのものです。子どもたちが工夫して遊べるように、斜めだったり複雑な形だったりときさまざまな遊具を設置しました。小さい子が危なくないよう、大きな子が遊ぶための遊具はわざとはしごの下の段をはずすなどの工夫も。遊具の下には砂利を敷いて、落ちてても危なくないようにしています。高崎の子どもたちには、何回も来て、思いっきり遊んでほしい。気持ちよく自由を感じてもらいたいですね。

ケルナー広場の実現に尽力したのは、NPO法人「時をつむぐ会」の代表の続木美和子さんでした。カッパピア跡地の活用に関心を抱き、再整備検討委員会の委員でもあった続木さんは、「はぐくみの丘」の運営に参加することになっていました。たまたま聞いたケルナー氏の講演に共鳴し、ケルナー広場の着想を得たといいます。カッパピア閉園の2年後、ケルナー氏が来日した折、市の許可を得てカッパピア跡地を見学してもらいました。翌年、ケルナー氏は自費で来日し、一週間かけて跡地の写真を撮り、写真集を作りました。この経験が、ケルナー広場の「オートクチュールな遊具」の製作につながり、さらにこのたびの新たな遊

具の創造に結びついたのです。ケルナー氏は、カッパピアにあったメリーゴーラウンドやサイクルモノレール、ゴーカートなどをイメージした9種類14基の木製の遊具を、ケルナー広場の西側エリアに設置しました。平成30(2018)年3月24日に利用開始となったこのエリアは「観音山ミニ」と命名され、現場にはケルナー氏からのメッセージボードが掲げられています。

親愛なる子どもたち、親愛なる保護者たちへ

私は、とても小さな子どもたちのために何か新しく素敵なものを作りたいと考えた時、以前、この場所が遊園地であったときの写真を手に取ってみました。そこで、昔あったものを忘れないように、そして敬意を表すために、遊園地の風景から発想した新しい遊具を考えました。緩やかな芝生に点在するユニークな遊具は、小さな子どもたちの五感に刺激を与えます。遊具の真ん中は、「守られている場所」として、その周りを囲む保護者たちが笑顔になる空間を作りました。

Hans-Georg Kellner ハンス・ゲオルク ケルナー

現在、ケルナー広場は指定管理者制度を採用しており、NPO法人「時をつむぐ会」が管理をしています。平成29(2017)年7月17日、広場の近くに子ども用プールを備えたプールエリアもオープンし、観音山公園(仮称)はますます充実した子どもの遊び場となっています。

第4章 群馬県内の遊園地

第1節 前橋市の遊園地：前橋市中央児童遊園・るなぱあく

「るなぱあく」の愛称で親しまれる前橋市中央児童遊園にも、カッパピアと同じように博覧会を機に誕生した歴史があります。平成19(2007)年の「広報まえばし」12月5日号によれば、昭和29(1954)年10月1日、前橋市は市制施行60周年および周辺町村との合併を記念し、近代的な大都市へと発展していく足掛かりとして、大博覧会「前橋グランド・フェア」を開催しました。大手町に設営された4つの会場のうちのひとつが中央児童遊園で、約8,800平方メートルの敷地に、お猿の電車、豆自動車、飛行塔、観覧車、メリーゴーラウンドといった遊戯機械が設置され、シカやクマ、キツネ、サル、七面鳥、クジャク、水鳥などの動物も展示されました。1カ月の開催期間中、4つの会場に24万8千人が来場したそうです。

フェアの終了後、中央児童遊園は児童厚生施設として残ることになり、別の会場に設置されていた自動木馬2台が移設されてきました。さらに3台を加え、合計5台の木馬に乗れる「もくば館」が誕生します。このように、博覧会の施設をベースにした遊園地づくりは、大観覧車で有名なウィーン万博(1873年)の跡地のプラーター遊園地や、ニューヨーク世界博(1964-65年)のためにディズニーがつくった「イツ・ア・スモール・ワールド」が、博覧会終了後にディズニールンドのファンタジーランドに移設された例など、世界的に見てもよくあること

でした。前者は高崎のこども博、後者は前橋のグランド・フェアに、それぞれ当てはまるパターンだといえます。

中央児童遊園の利用者数は年々増え続け、開園の10年後には年間100万人を突破しました。60年を越える長い歴史の中では、存続の危機も何度かありましたが、市民の反対などにより乗り越え、老朽化していた遊戯機械・遊器具も平成11(1999)年に17年ぶりに入れ替えられました。

平成18(2006)年から前橋市は、中央児童遊園に指定管理者制度を導入しています。その際、愛称を公募し、郷土の詩人・萩原朔太郎の詩「遊園地(るなばあく)にて」にちなんで「前橋るなばあく」に決まったそうです。NPO法人波宜亭倶楽部、NPO法人まやはし、一般財団法人前橋振興公社のあと、2015年4月1日からは、前橋市内で敷島公園などを運営する「株式会社オリエンタル群馬」が指定管理者です。元銀行マンで経営・財務コンサルタントの肩書きを持つ園長の原澤宏治さんは、それまで少なかったイベントを独自のコンセプトで開始したり、SNSを活用したり、近隣の遊園地との相互連携を図るなどして、話題性と集客の両面で大きな成功を収めています。

第2節 伊勢崎市の遊園地：華蔵寺公園遊園地

伊勢崎市の華蔵寺公園遊園地は、華蔵寺公園の一部をなし、華蔵寺に隣接しています。周辺には広場や各種運動施設(野球場、体育館、陸上競技場、競泳場、市民プール)もあります。

伊勢崎市史によれば、明治22(1889)年に伊勢崎に鉄道が開通したのち、明治26(1883)年に華蔵寺の溜池2つが国から無償で町へ下付されました。これを機に、桜を植えて公園化する計画が立てられます。華蔵寺は、鉄道の停車場から北に約1.5キロの好立地であったため、織物や蚕糸の工場で働く従業員の休憩・保養の場として、また京都・大阪・名古屋など遠方から来る商人の娯楽・観光の場として、白羽の矢が立ったのです。

明治29(1896)年、停車場から華蔵寺までの直路が開設されました。明治33(1900)年、国有林が華蔵寺に払い下げられ、同35(1902)年、町が華蔵寺から払い下げ山林を譲り受け、翌36(1903)年から梅、桜、ツツジなどの植え付けが本格的に始まりました。明治44(1911)年、名称を伊勢崎公園として開園したのち、大正3(1914)年の御大礼記念行事の一環として、さらに桜とツツジが植えられました。

その後、昭和43(1968)年に市営陸上競技場が華蔵寺公園西隣に完成したことにより、公園内にあった野球場跡地に遊戯機械7機種、小型遊器具18機種を導入し、昭和45(1970)年5月2日に遊園地がオープンしました。伊勢崎市のランドマークにもなっている大観覧車ひまわりは、華蔵寺公園遊園地のシンボルであり、市内のほぼ全域から見ることができます。平成18(2006)年、大観覧車を北関東自動車道伊勢崎インター近くに移設する計画が持ち上がりましたが、住民の反対運動によって中止となりました。

現在、伊勢崎駅をはじめとする市内の諸施設や市の観光マップなど、あらゆるところに大観覧車の写真やイラストがあしらわれており、市民に愛されている様



出典：けぞうじゆうえんちイラストマップ（2018年11月）。

子が何えます。華蔵寺公園遊園地でも、運営者は伊勢崎市ですが、指定管理者制度を導入しており、公益財団法人伊勢崎市公共施設管理公社が指定管理者となっています。

第3節 桐生市の遊園地：桐生が岡遊園地

桐生が岡遊園地は、桐生市中心部の小高い丘の上であり、展望台や観覧車から市内を眼下に収めることができます。この見晴らしのよい場所に、明治42(1909)年頃から森宗作や本多七九郎らの地元有志が、桜を植えたり山道を設けたりして公園造りを始めました。明治45(1912)年にライオン像、大正4(1915)年には休憩所が完成します。大正5(1916)年、公園の敷地の所有者であった二人は、6,917平方メートルの同地を桐生町に寄付しました。町は隣接地を借り受け、10,579平

第7図 桐生が岡遊園地・動物園 園内マップ



出典：桐生が岡遊園地・動物園パンフレット（2018年11月）。

方メートルの町営公園となりました。大正10（1922）年の市制施行に伴って、桐生が岡遊園地は市営公園となります。昭和28（1953）年、桐生が岡動物園が開園し、翌年には鳥舎が設置され、さらに動物の種類も増えていきました。

桐生市で最初にできた遊園地は、昭和28（1953）年開園の「新川児童遊園地」です。この遊園地は「桐生市が北関東の〈子どもの天国〉と誇っていた」もので、次のようなエピソードが残っています（『我が愛する郷土 桐生百景』服部修）。

ある日市長のもとに一通の手紙が届いた。開いてみると一少年からの投書。「市長さん、ぼくたちのために児童遊園地をつくってくれる約束でしたが、早くつくってください」という文面。

そのころ市では「広報」を通じて「市政に対する希望」を市民からつづっていた。また市長は新川に移動動物園がきたとき、子どもたちに「この動物園が終わっ

たら、みなさんのために遊園地をつくってあげます」とあいさつしたのです。それから一年。まだその計画もできていなかったが、「この投書こそ子どもたちの意見を代表したものにちがいない。いや、それよりも子どもたちに対して約束を果たさずにいたことは、なんととっても申しわけがない」。市長は、早速工事はじめられるようにした。……。

この遊園地は新川橋から桐生橋まで二百十五メートル、広さ約一万一千八百平方メートルの地に、トンネルや鉄橋もある一周五百メートルの豆汽車、三百メートルコースの豆自動車、八人乗りの観覧車、飛行塔、メリーゴーラウンド、波乗りボートなど次々に設け、緑地帯にはたくさんのベンチなど、子どものための安全な遊具をもった夢多き子どもの天国であった……。

子どもの声にこたえて誕生した新川児童遊園地は、昭和 28 (1953) 年 5 月の「こどもの日」に開園しました。入場者は初年度で 40 万人を超えたといえます。昭和 46 (1971) 年 2 月に閉園しますが、同年 4 月に桐生が岡遊園地が開園したので、実質的には移転といえます。桐生が岡遊園地でも指定管理者制度を採用しており、公益財団法人桐生市スポーツ文化事業団が管理をしています。

第 5 章 地域社会と遊園地

前章までに、観音山における公園の誕生と観光開発、こども博覧会の開催と市営遊園地の成立、遊園地が黄金時代を迎えた頃のフェアリーランドとカッパピアの思い出、そしてカッパピアの閉園からケルナー広場のオープンまでの経緯、さらに県内の遊園地の歴史と現状について見てきました。これらの中には地域社会と遊園地について考える材料がたくさん詰まっているように感じます。子どもの「遊び場」をキーワードに、振り返ってみます。

かつて、公園は主として大人が楽しむために造園された遊観の場でした。博覧会もまた、大人が外国の商品や先進的な技術に出会い、学び競うための場でした。やがて、家族単位の娯楽を好む都市の新中間層が増加したことにより、子どもを含む家族連れの客を意識した博覧会が登場します。子どものための展示や遊び場が設けられるようになり、子どもに特化する博覧会も現れました。こども博覧会では、学びと遊びの両立が強調されます。

高崎のこども博でも、「近代的なこどもの遊び場や新しい遊器具」が、「文化教育に大切」なものと考えられ、各種の展示や動物園、小さな遊器具から大型の遊戯機械まで、全てが子どもたちの学びと遊びのために準備されました。市営の遊園地には昆虫館もできました。フェアリーランドのキャッチフレーズは「スピードと高さ、冒険心とスリルを心ゆくまで楽しみながら、学習できる遊園地」でしたし、カッパピアでも、遠足のお土産の買い物は、お金の計算の勉強になりました。

遊園地と並んで、博覧会の重要な後継施設に百貨店があります。百貨店も、新しい技術と商品に触れることができる身近な場です。仮設の博覧会から、常設の遊園地・百貨店へと、展示・体験または展示・販売の場所が移動したのです。こ

こに、大きな落とし穴があります。つまり、技術は日進月歩ですし、商品はあつという間に流行遅れになってしまいます。遊園地が時代遅れにならないための努力は遊戯機械の入替えですが、莫大な金額を要します。投下資金回収のため、利用者を増やすには、ターゲット層を広げることも一つのアイデアです。子どもだけでなく、大人にも利用してもらおうのです。こうして、巨大化し高速化し過激化した大人のためのアトラクションが増えたことで、身長制限や年齢制限のために、子どもが遊べないアトラクションが多くなりました。本末転倒です。

地域社会には、子どもの遊び場が必要です。親子と一緒に遊べる場所が理想です。ほどほどに過激な遊園地は、その理想に近いもののひとつだったと思います。けれども、遊園地が成功するには厳しい立地条件があります。利用者の潜在人口が多いことと、常に拡張し続けるための広大な土地があることです。定期的なアトラクションをリニューアルする必要もあります。駐車場の整備や渋滞の対策も避けられません。遊園地の建設は、地域社会において、自治体にとっても民間企業にとっても、大きなリスクになりえます。そこで、幾つかのアイデアを並べておこうと思います。

まず、移動遊園地という選択肢です。片道2時間程度の場所に大規模で魅力的なテーマパークが立地している場合、中規模遊園地は常設である必要はないかもしれません。たとえば、温泉地ルストに立地するドイツ最大のテーマパーク「ヨーロッパ・パーク」は、ヨーロッパで最も集客力のあるテーマパークのひとつです。対照的に、ルストから片道2時間程度の場所にある大都市フランクフルトやミュンヘンには、大規模なテーマパーク・遊園地はありません。その代わりに、フランクフルトには3月後半から4月半ばの民族祭、ミュンヘンでは10月に開催されるビール祭り「オクトーバーフェスト」に際して、巨大な移動遊園地が現れます。季節感のある祝祭に非日常性が演出され、目新しさだけでなく建設費・維持費など、仮設の遊園地は多くの点でメリットがあるように感じます。

次に、広域連携という選択肢です。子どもの遊びは多様です。年齢によっても異なります。それゆえ、ひとつの自治体で、あらゆるタイプの遊び場を建設し維持するのは現実的ではありません。近隣の市町村にあるものをつくらない、互いに独自性のある遊び場をつくって共存するとともに、利用者の選択肢を増やしていくという考え方です。そのためには、各自治体が特色のある魅力的な、自慢できる遊び場をつくる必要があります。広域連携は交通アクセスが障壁になりえますが、知恵を出し合えば解決できるかもしれません。すでに、るなばあくは華蔵寺公園遊園地や桐生が岡遊園地との連携を強めているようです。

最後に、全天候型の施設は不可欠です。大型のテーマパークでは、全天候型の施設の設置がますます進んでいます。雨天時や冬季は客足が鈍るからです（ヨーロッパでは中規模遊園地の多くが冬季休業）。全天候型は全季節型でもあるため、天候や季節に左右されない遊び場が提供できれば、利用者にもメリットがあるだけでなく、雇用も守ることができます。ただし、大きな施設を建設するのではなく、移動可能な施設の設置を想像しています（たとえば、トレーラーハウスやログキャビンなど）。屋根と壁のあるスペースが、自然の中に違和感のない形で配置できれば、

強い日差しを避けたり、お弁当を食べたり、休憩したりできますし、場合によっては災害時に利用することもできるかもしれません。

おわりに

私が遊園地に関心を持ったきっかけは、長年研究しているインドが市場開放とともに経済成長を果たし、都市に住む新中間層の人びとの娯楽の場として、2000年代以降、遊園地・テーマパークが急増していく様子を目の当たりにしたことです。それまで、ほとんど興味を抱かなかった遊園地・テーマパークですが、物珍しさから調査を始め、比較研究のために日本の各地、アジア、そしてヨーロッパにも足を運ぶようになりました。すると、どこに行っても見かけるアトラクションが、どの国・地域でも同じではないこと、つまり、装い（内装・外装）や物語（ストーリー設定・世界観）にご当地性のあることが分かってきました。たとえば、シューティングゲームのターゲットや、お化け屋敷のモンスターの設定など、敵や化け物が文化や時代を反映しているのです。奥が深いと思いました。

このような縁で、高崎市の遊園地について執筆する機会をいただいたのですが、高崎市にはすでに遊園地がありませんでした。その代わりに、市役所と市立中央図書館からは貴重な資料を提供していただき、また多くの方がカッパピアの思い出を語っていただきました。データの蓄積は叶いましたが、限られた時間と紙幅のために、資料やお話の内容の理解と表現が十分ではなかったかもしれません。今後、修正していきたいと思います。遊園地という切り口から高崎市の歴史を振り返る試みは、これからも続けていく所存です。高崎市民・群馬県民のみなさまにおかれましては、こども博やカッパピアの記録や資料をお持ちでしたら、ぜひとも本学地域科学研究所までご連絡いただけますようお願いいたします。

〔参考文献〕

- 内山正雄・簗茂寿太郎『東京の遊園地』響学舎（1981年）。
小野良平『公園の誕生』吉川弘文館（2003年）。
澤喜司郎・齋藤英智『遊園地の乗り物と遊びの文化』成山堂書店（2012年）。
白土健・青井なつき『なぜ、遊園地は子どもたちを魅きつけるのか？』創成社（2016年）。
白幡洋三郎『近代都市公園史の研究：欧化の系譜』思文閣出版（1995年）。
田中正大『日本の公園』鹿島出版会（1974年）。
中藤保則『遊園地の文化史』自由現代社（1984年）。
能登路雅子『ディズニーランドという聖地』岩波新書（1990年）。
橋爪紳也『日本の遊園地』講談社学術新書（2000年）。

これら以外にも、市史、社史、新聞記事、インターネット記事、遊園地を取り上げたムック本、写真集などからも多くの知識や情報を得ることができました。

執筆者紹介

小牧 幸代（こまき さちよ）

高崎経済大学地域政策学部教授。東京外国語大学大学院地域文化研究科博士後期課程中退、博士（学術）。京都大学人文科学研究所助手、高崎経済大学専任講師、准教授を経て、2012年より現職。専門は、文化人類学（インド・パキスタンのイスラーム研究）。最近の研究テーマは、インドの遊園地・テーマパークにおけるイスラーム表象、ノルウェーのパキスタン系移民社会における家族・親族・結婚、南アジアにおけるイスラームの聖者信仰と聖遺物信仰など。

高崎経済大学ブックレットの刊行について

高崎経済大学の付置研究機関であります地域科学研究所では、経済学、経営学、地域政策学に係わる基礎的研究を行う一方、高崎市民、群馬県民のみなさまの生涯学習に寄与するために、公開講演会、公開講座、高崎市中央公民館との連携公開講座、地域の歴史や地域問題を学ぶ地元学講座、地域めぐり、そして中心市街地に復活し、本学学生が運営しているc a f e あすなろを会場とした市民ゼミなどの事業を展開しております。

今般、高崎経済大学では、高崎市民、群馬県民のみなさまに、高崎市の歴史や現状をよりよく知っていただく一助となるよう高崎経済大学ブックレットを刊行することにいたしました。

今後、様々な角度から高崎市の過去・現在・未来を考えてまいります。一読いただき、感想をお寄せください。また、取り上げてもらいたいテーマなどがありましたら、地域科学研究所までお寄せください。お待ちしております。

第1号は、高崎市の遊園地をテーマとして、地域科学研究所・小牧幸代所員（地域政策学教授・文化人類学）が執筆いたしました。今日、市民に親しまれている観音山のケルナー広場の起源は1952年に開催された「新日本高崎子ども博覧会」です。博覧会后、市営、民営を経て、現在に至っています。群馬県内の都市公園の歴史も交えながら、高崎市の遊園地の変遷をまとめました。



発行 2019年3月15日
著者 小牧幸代
編者 高崎経済大学地域科学研究所
〒370-0801
群馬県高崎市上並榎町1300
電話 (027)344-6267
E-mail:chiikikagaku@tcue.ac.jp
© 高崎経済大学地域科学研究所 2019
印刷 / 荒瀬印刷株